



ミンガラバー

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

協会設立20年を迎えて

認定NPO法人日本ミャンマー医療人育成支援協会

理事長

岡田 茂

「ミャンマーにおける医療の高度化を促進するとともに、グローバル化する疾病に対してミャンマー及び日本を拠点としたアジア全域にわたる高度医療を實踐できる体制の確立」(定款より)を目指して出発した私たちの協会。2005年(平成17年)10月12日の設立総会での決議を経て06年3月3日に認証を受け、第1回の理事会を4月18日、総会を6月12日に開催しました。また、12年(平成24年)5月18日には、税制優遇措置の条件となる認定を国税庁長官から受けています。これは、岡山県では制度開始から3件目の認定。その後、当制度は岡山市に移譲になり、継続して認定を受けています。

1つはミャンマーの政情で、長年の軍事政権が崩壊し、民政移管を経てアウンサンスーチー氏が実権を握る政権が誕生したこと。いずれも嬉しい想定外でした。さて、その後の10年ほどうだつたでしょうか。

最初の数年は岡山大学など多くの大学を巻き込み、活動は順調に進みましたが、暗転したのは20年初頭より4年間続いたコロナ禍と、21年2月1日に起こったミャンマー国軍のクーデターです。前者は、ほぼ世界中の航空機の運航を止めて国際交流は不可能となり、後者によってミャンマー国内における活動の領域が大幅に限られるようになりまし

た。また、この非情な時の流れの間に石川隆俊氏、中山睿一氏、田中茂人氏、西崎建策氏、木股敬裕氏、前坂匡紀氏など、協会の設立時より中心となって活動された多くの理事が亡くなられています。

こうした場合にもかわらぬ、協会は当初の目的から外れることなく、「医療人育成」を中心に活動できるように、「田中医療奨学金」「あかね介護奨学金」の設

立もあり、多くの奨学生を輩出しています。また、現地における多くの教育施設寄付、小児白内障患者への手術協力、最近のミャンマー中部大地震に対する復興支援など、現地のパートナーと共に行動を続けたいと考えております。そして、次の10年に再び「嬉しい想定外」が見られることを期待している次第です。

16年(平成28年)、設立10周年を迎えて発行した「ミンガラバー」特集号の編集後記で、当時の編集長の故・西崎建策氏は、2つの想定外を挙げていました。1つは、私たちの協会を例えて、路地裏で細々と始めた小店(こみせ)がいつの間にか、表通りに品揃え豊富な大店(おおだな)を構えるように成長したこと。もう

1つはミャンマーの政情で、長年の軍事政権が崩壊し、民政移管を経てアウンサンスーチー氏が実権を握る政権が誕生したこと。いずれも嬉しい想定外でした。さて、その後の10年ほどうだつたでしょうか。

最初の数年は岡山大学など多くの大学を巻き込み、活動は順調に進みましたが、暗転したのは20年初頭より4年間続いたコロナ禍と、21年2月1日に起こったミャンマー国軍のクーデターです。前者は、ほぼ世界中の航空機の運航を止めて国際交流は不可能となり、後者によってミャンマー国内における活動の領域が大幅に限られるようになりまし



本年2月、ミャンマー中部大地震に対応して透析機器の保全に関するセミナーを開催(前列は主催者グループ。中央に国民健康財団タンセイ理事長、後列は病院関係参加者の面々)

ミャンマー医学研究大会に

岡山大学から7年ぶりの参加

ミャンマー医学研究大会(MHRC)へは第33回の2005年(平成17年)以来第48回の2020年(令和2年)までの16年間で延べ98人の岡山大学およびその関係者が演者或いは座長となつて登壇しています。しかし、その後のコロナ禍、国軍クーデターなどで参加は中断していましたが、第54回MHRC

(2026年1月26日より30日)の主催者である国立医学研究局長 エイエイクン教授よりの招へいがあり、岡山大学より病院病理部の柳井広之教授と病態生理・創薬学講座の中山雅敬教授は特別講演の演者、腫瘍制御学講座の平澤晃教授はシンポジストとして参加しました。



1月27日、医学研究局にて、岡山大学からミャンマー医学研究大会への参加者(左より岡山大学平澤晃、柳井広之、中山雅敬各教授、医学研究局長エイエイクン教授および協会の岡田茂理事長)

中山雅敬

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 病態生理・創薬学教授

いただき、クリニックの活動記録が展示されているのをじっくり見させていただきました。村には約2,200世帯、約11,000人が暮らしていますが、クリニック設立以降、5歳以下の予防接種率は100%に達しているとのことでした。また、助産師資格を持つ看護師が配置され、出産にも対応しており、2025年には180件の分娩すべてを受け入れたそうです。地方部では約40%の出産が自宅で医療従事者の介助なく行われている現状を考えると、このクリニックが地域医療の拠点として果たしてきた役割は極めて大きいでしょう。一方で課題も明らかでした。備蓄されている薬剤は、アスピリン、抗生物質、ARB、ホルモンがわずかにある程度で、多くの人が最低限の医薬品にすら十分にアクセスできない現状に大きな衝撃を受けました。また、2025年3月の大地震により建物の一部に亀裂が入り、雨漏りも深刻な状況でした。いずれにしても日本から見れば多額とは言えない支援で大きな成果を上げることができる現状には考えさせられるものがありました。

こうした医療資源の乏しい中で、ミャンマーにおける腎疾患の実情は特に深刻です。現地では40歳以上の約2~3割が糖尿病ではないかと言われており、薬局には日本のドラッグストアで風邪薬のコーナーがあるような様子で「糖尿病」専用のコーナーが設けられています。現地での糖尿病の身近さ、深刻さ、医療事情の違いが窺い知れます。糖尿病性腎症も多いものの、腎不全に至ると透析費用は平均月収と比べて非常に高額で、継続治療が可能な人はほとんどいません。国全体でも透析機器は1,000台余り、腎移植はヤンゴン全体で年間数件程度にとどまることから、ここでは腎不全は人生の終焉を意味します。

こういった現状を変えるには、医療インフラの整備もさることながら、教育により人を育てる以外に道はないと強く感じます。様々な背景を持つ人が育つことが必要です。私の研究室で働くミャンマー出身者は、この国のエリート中のエリートだと感じていましたが、今回の訪問を通じて、再認識しました。現状、彼らが帰国することは容易ではありませんが、だからこそ彼らをしっかりと育成し、この中から将来世界基準で存在感を発揮することができ、この国の医療や研究を支える中心的な存在になれる人物を輩出したいと強く感じた次第です。

初めてミャンマーを訪問しました

岡田先生にお誘いいただき、この度、ヤンゴンを訪ねる機会を得ました。先生とは家族ぐるみのお付き合い。そのご縁から、2022年の日本帰国以降、これまでにミャンマー出身の学生7名を私の研究室で受け入れています。ミャンマー訪問は初めてでしたが、彼らの母国を実際に訪ねることに大きな意義を感じていました。

今回、Myanmar Health Research Congress への参加が第一の目的でした。私は創薬研究、とりわけ腎疾患を対象とした薬剤の研究開発を日米独にまたがる形で行っています。しかし軍政下のミャンマーでは研究施設や設備が極めて限られている上、人の行き来も制限され、私たちが行っているような研究は困難です。そのため、どのような内容で講演すべきかについて慎重に検討し、最終的には、糖尿病の歴史の中で、私たちの研究がどのような位置づけにあり、何をどうやって克服しようとしているのかを丁寧に説明することにしました。現時点では同様の研究が難しくとも、現地の優秀な若手研究者や医療者に、世界の最先端で行われている研究を知ってほしいと考えたのです。1時間弱の講演でしたが、この中から母国を飛び出し、最前線で活躍する人材が育ってくれることを願いました。

第二の目的は、2013年に父が主導し、実家で経営していた会社からの寄付によって設立されたクリニックの訪問でした。クリニックはヤンゴン中心部から車で約40分の非常に貧しい村にあります。父は常にこのクリニックの現状を気にかけており、特にコロナ禍以降、十分に機能しているのかを心配していました。医師はおらず、看護師のみで運営されており、役割を果たせているのか不安を抱きながらの訪問でした。実際に訪れると、非常に温かく迎えて



寄付クリニックでの記念撮影。前列左が筆者

今年のチャリティ大集合は

ミャンマーを支援

アジアやアフリカ等の貧困に苦しむ子供たちを支援するチャリティ大集合(主催…

ストリートチャイルド支援実行委員会代表・星島淑子氏)。第24回となる今回は

2月22日に西川アイプラザで開かれ、本協会と、ミャンマーで活動する「ミャンマーファミリークリニックと菜園の会」理事長・名和仁子氏)が支援を受けた。2004

年以来、毎年、岡山大学の留学生と共に参加している協会では、今回もミャンマーの現状を報告。留学生たちは、民族舞踊などを披露した。

MJCP奨学金制度からの旅立ち

今春、MJCPの田中医療奨学生からは3人が博士の学位を取得した。新潟大学大学院修了のミョーマウンマウン、エイマヤーカインさんの2人(ミンガラバー前号で紹介)はミャンマーで、岡山大学大学院修了のヤミンソウさんは日本国内で就職する。一方、あかね基金介護奨学生からは7人の介護学科学学生がすべて見事に介護福祉士の国家試験に合格。その内訳は旭川荘が4人、和歌山社会福祉専門学校が3人で、全員が日本の介護施設に就職が決まっている。この内、ヤミンソウさんと和歌山社会福祉専門学校卒業の3人から手記をいただいた。



旭川荘広報室長小幡篤志理事と旭川荘の卒業生(左からニンミャモンさん、カウサンディさん、チェリーティンさん、ティンモートエさん)＝3月17日協会事務室にて

岡山大学学術研究院医歯薬学領域口腔病理学分野 ヤミンソウ



3月に岡山大学大学院を修了し、博士(歯学)の学位を取得しました。医療と教育は、幼い頃から私の人生の一部でした。家族が医療分野で働いていたので若い頃、共に外国に出かける機会がありました。その経験は、異なる文化や生活様式に興味を持つきっかけとなり、国際的な学術環境で学びたいという思いに繋がったのです。

2019年にヤンゴン歯科大学を卒業した後、2年間、歯科医師として働きました。その後、岡山大学を知り、先進的な研究環境が整う日本での学術研究に興味を持つようになったのです。22年来日しましたが、当初は多くの困難に直面しました。しかし、日々の学習と経験の積み重ねで、徐々に克服。日常生活の中で文化の違いを学ぶことは、特に興味深く、充実したものとなりました。私費留学生なので、研究とアルバイトの両立も大きな挑戦でした。そんな中、岡田先生の励ましと推薦で田中医療奨学金をいただくことができたのです。田中茂人先生のご遺族、岡田先生、NPO法人の皆様のご厚意に、心より感謝申し上げます。

長塚仁教授のご指導の下で、私の研究テーマは腫瘍微小環境、特に血管新生に関するものです。私は、特定の治療薬が腫瘍の血管系にどのような影響を与えるかについての研究をしました。これはがんの成長や生存にとって重要なため、非常に意義深い研究です。口腔がんは、ミャンマーや世界中でよく見られるため、この研究を通じて、将来、より良い治療に貢献したいと考えています。教授や研究室メンバーの継続的なご指導とご支援のおかげで、無事に学業を修了することができました。心から感謝しています。留学生として、日本で学び、研究できたことは、非常に貴重な経験でした。国際的な研究者は、様々な視点と知識を世界と共有することで、日本の研究をグローバルな医療ニーズと結びつける役割を果たせると信じています。

和歌山社会福祉専門学校 プーワイソー

高校卒業後、新型コロナウイルスの流行もあり、家族と一緒に生活していました。約2年間、長女として家事をしたり、両親の手伝いや弟や妹の世話をしていたのです。その後、父の勧めで日本語の勉強を始めました。勉強を続ける中で、家族の世話や手伝いをした経験から、人の役に立てる仕事がしたいと考えるようになり、介護の分野に興味を持って日本に来ることを決めました。

日本に来たばかりの頃は、日本語があまり分らず、職場や学校でコミュニケーションを取ることが難しく、不安を感じることも。しかし、周りの人と関わる中で会話をすることが増え、日本語にも少しずつ慣れてきました。また、日本は思っていた以上に安全で安心できる国だと感じました。生活もとても便利で、毎日安心して過ごすことができています。

現在は介護福祉士の国家試験を受験し、結果を待っています(注:合格しました)。自分の思い通りの結果になったら、これまで学んできた知識や技術を社会や職場で生かし、多くの人の役にたてるよう努力していきたいと考えています。

8校目の寄付学校となる第3あかね学校が誕生

仮設での勉強を余儀なくされていたエーヤワディ管区ミヤウンミヤ郡区シユエイアイチヨウ村の子供たちに、昨年11月、鉄骨造の高等学校が誕生。西村照子理事による3校目、協会では8校目の寄付学校となる。

ヒカリカナタ基金による5回目の小児白内障手術

短報

放置すれば失明する先天性白内障の子供5人、外傷性白内障の子供1人が、昨年11月、ヤンゴン国立眼科病院で手術を受けた。これは認定NPO法人「ヒカリカナタ基金」(竹内昌彦理事長)から手術費用と患者、家族の旅費滞在費の委託を受け、当協会と「ミャンマー国民健康財団(PHF)」(タンセイ理事長)が手配や手続き等を行っているもの。眼帯が取れた子供たちがク

編集後記 地球上の至る所で戦火が絶えず、自然災害も無力な人々に降りかかり続けます。こうした世情の中、ミャンマーでの諸問題が風化しないことを願うばかりです。Think globally, Act locallyという言葉もあるように、広い視野を持ちつつ、足元を見つめた着実な行動が肝要でしょう。(松尾)

レヨンで描いた絵は、基金の活動報告で展示。手術費用の募集に役立てる。同基金では、今年の11月も手術支援を行う予定。

和歌山社会福祉専門学校 エーナダーチョー

私が介護の道を選んだ理由は、子供の頃の経験にあります。母が入院した際、看護師の方々がとても温かく接してくださり、患者にとって看護師がいかに大切な存在であるかを身をもって実感しました。

その経験から、高校卒業後は看護学校に進学したのです。しかし、2年生の時に新型コロナウイルスの影響で休校となり、その後の情勢不安も重なって、残念ながら学業を断念せざるを得ませんでした。休校中に、友人と一緒に老人ホームでボランティア活動を行いました。そこで、助けを必要としている方々の心と体をケアすることに、大きなやりがいと意味を感じたのです。

そこで、困っている人を支える仕事がしたいと強く思い、日本で介護を学ぶために日本語学校で勉強を始めました。日本に来てからも、先生方の熱心で手厚いご指導のおかげで、介護の知識や技術をしっかりと学ぶことができました。また、実習や現場の方々もとても親切で、丁寧に教えてくださったことに心から感謝しています。

そんな中、このプログラムの奨学金制度のおかげで、経済的な不安が減り、生活が安定しました。その分、勉強に集中できる時間が増え、より深く介護について学ぶことができたのです。恵まれた環境で学べたことに感謝し、これからも精一杯努力していきたいと考えています。

卒業後も、学んだ知識や技術を現場でしっかりと活かし、まだ足りない部分は日々学び続けながら、信頼される素晴らしい介護福祉士になる決意です。日本で学んだ質の高い介護技術によって、一人でも多くの人を笑顔にしたいと考えています。

和歌山社会福祉専門学校 モートウザー

日本に来る前に、日本語能力試験でN2の資格を取得するために、ミャンマーで勉強していました。その時、先生から、どんな理由で日本語の勉強をしているのかと聞かれましたが、最初、私には一つも理由はありませんでした。しかしながら、先生から介護の仕事と農業の仕事の説明された時に、私は介護を学びたいと思ったのです。

日本は、世界の中でも高齢社会が進んでいる国ですが、介護施設などは人手不足により、私達みたいに外国人を受け入れる制度をより良く作っています。そのような国で仕事をしたい理由は三つあります。それは、①自分にとって安定した仕事ができる。②長く働くことができる。③日本語レベルが上がる。等々があり、私は日本の介護が学びたいと思い、この仕事を選びました。

日本に来る前の印象と、今の印象はまったく変わりません。治安も良いし、綺麗な国です。ただ、物価が少し安くなり、地震が少なくなったら、もっと暮らしやすいでしょう。

これからは、バイトをしている施設で就職し、今より成長した自分を見つめたいと考えています。日本語のレベルアップをすることも目標です。

この一年間の優しいサポートは、私にとって大きな支援になりました。いつも心から感謝しております。

五人きたば学園 和歌山社会福祉専門学校 第28回卒業



和歌山社会福祉専門学校の卒業式で(左からエーナダーチョーさん、モートウザーさん、プーワイソーさん)

医療と心を繋ぐ出会いの旅

美鈴セラピア鍼灸 石部 春子

昨年11月、2度目となるミャンマーを訪問。多くの方々の医療・教育・支援活動に触れ、現地の皆様とも心を通わせることができ、大変貴重な機会となりました。

到着翌朝は、ヤンゴンから車で西へ約5時間のエーヤワディ州ミヤウンミヤ郡区にある小さな村へ。協会の西山理事の寄付で建設された高等学校の開校記念式典に参加したのです。大勢の子どもたちと村中をあげての温かい歓迎(写真)に触れ、学びを大切にする姿から、未来への大きな希望を感じました。ミヤウンミヤの街では、地域の人たちの健康を守るボランティア活動をしている女医の名知仁子先生たちと夕食。質素な生活と熱意には、心から感銘を受けました。

ヤンゴンに帰ってからは、MAJA(ミャンマー元日本留学生協会)でお会いした医師たちに、日本式の鍼灸の施術を実際に体験(写真)いただきました。日本式鍼灸は、細い鍼とやさしいお灸を用い、小さなお子さんからも高齢の方まで安心して受けていただけるもの。自律神経の調整や、痛み・ストレス・様々な不調の緩和にも役立ちます。施術を受けられた先生方からは「とても心地よい」「身体が楽になった」といった声をいただき、大変うれしく思いました。私の施術を体験していただいた先生方は、日本式のやさしい鍼やお灸、ツボ押しは、特別な設備がなくても行えるセルフケアとして役立つとのこと。ミャンマーの皆様が心身ともに健やかに穏やかな日々を過ごされる一助となれるよう、続けていきたいと思いました。

事務所が休日となった土曜日には、昔の都、バゴへ。長い歴史をもつ寺院や仏像を訪れ、信仰とともに生きるミャンマーの人々の心に触れました。日本とミャンマーは仏教の形こそ異なりますが、人の幸せを願う気持ちは共通しているはず。また、帰路の途中で日本人墓地を訪れ、遠い異国の地で生き、人生を終えられた日本の方々にも思いを馳せて静かに手を合わせました。過去から現在へと続く人と人との

繋がり、国を越えたご縁の重みを改めて感じる一日でした。

翌日は、ミヤウンミヤにも同行されたタンセイ先生の国民健康財団(PHF)の事務所で、「Myanmar-Japan Alliance Business Association(MABA)」のネリン会長に会いました。会長は、協会がマンダレー地震の復興支援をしていることのお礼に、マンダレーから来られたのです。岡田先生は、その場で第2回目の寄付をされていました。私たちは地震の状況についてのお話を聞き、協会からの寄付によって建てられた仮設住宅なども知ることができ、支援が人々の生活を支え、希望に繋がっていることを実感しました。

ミャンマー滞在の最終日には、ヤンゴンにある眼科病院で「ヒカリカナタ基金」グループのご寄付によって行われている小児白内障手術や、術後の子どもたちの様子を見学。術後の子どもたちの明るい表情はとても印象的で、医療の力と支援の大切さを改めて実感しました。

ミャンマーでの多くの出会いと学びに感謝しながら、これからも人と人、そして健やかな身体と心を繋ぐ活動を大切に続けてまいります。

